

UZI SUBMACHINE GUN

Report by Ken Nozawa 図版解説/鈴木健太郎

Cover Photo
Nationaal Archief
© WORLD PHOTO PRESS 2024
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

004 第64回 **サイゴン物語** Saigon Memories
MACVがいたベトナム戦争「入口から出口まで」[13]

038 **ベトナムで戦った
アメリカの同盟国軍** Part 1

044 **ベトナムを遠く離れて——。**
嗚呼、JAC Part 4、大仕事、AR-18! [前編] 文/小倉徹

046 **LIFEが語るベトナム戦争**
20世紀アメリカ社会と兵士の顔 文/原克(早稲田大学教授)

SHARK SHOOTER LIVE-FIRE REPORT!
058 **CZ Shadow2 COMPACT**
Report by Muneki Samejima

066 **ウエスタンアームズ新製品レポート**
Report by SHOTGUN MARCY
●SIG1911 プロカット ハイ・キャパシティ 4.0

071 **タナカ・ワークス新製品レポート**
Report by SHOTGUN MARCY
●S&W パフォーマンス・センターM627 5インチ
8ショット ステンレス・フィニッシュ Ver.2
●S&W .38チーフ・スペシャル・エアウエイト
ベビー・エアクルーマン HW Ver.2

074 **トイガンニュース**
ウエスタンアームズ
●ベレッタM8045 クーガーF CBHW Ver.
タナカワークス
●S&W M29 クラシック4インチ HW Ver.3
●スモルト・リボルバー 4インチ HW Ver.3 スクエア・ハット

076 **Militaria Roundup!**
U.S.NAVYユニフォーム Part 2

082 **東京マルイ
NEWアイテム2023-2024**
●VSR-ONE ステルスグレー/ファントムブルー
●パトリオット+
●G17 Gen5 MOS



DJちゅうの
089 **GEARHEADS JUNCTION**
ゼロオベレーターズ ノットファイナル

ニッポンのちからこぶ 写真・文/菊池雅之

096 **北部方面隊
戦車射撃競技会**
サバゲ三等兵APS部 特別編
104 **マルゼン・コッキングエアショットガン
「CA870タクティカルII」の巻**

COMBAT FRONT LINE

- 103 今月の中田焦点! モーガンメンフィスベル
TYPE A-2フライトジャケット ゴートスキン
- 108 新作映画情報「アンブッシュ」[エクスペンダブルズ
ニューブラッド]「トーク・トゥ・ミー」
- 100 ボスゲリラ不屈のトイガン魂!
サバゲ・マスカラ・コントラ・マスカラ!
- 106 レアミリタリーテクノロジー
- 109 読者プレゼント & CIC
- 110 バックナンバー
- 111 次号予告&奥付



ミリタリースポッター

**A sinkhole was the key factor in discovering the tunnel.
Once a tunnel collapses, it is likely to induce trauma-level fear.**

**Digging tunnels in the desert poses a significant risk of collapse
due to the potential for cave-ins. “An unfinished 1,300-foot
cross-border tunnel was discovered on August 4, 2020, after several days
excavating the sandy Sonoran desert terrain near San Luis, Arizona.”**

トンネル発見の決め手は、一つのシンクホール、すり鉢状の穴だった。トンネルが崩れでもしたら、トラウマ級の恐怖になる。砂漠でトンネルを掘ることは、落盤の危険がつきまとう。そんなトンネルの1本が「2020年8月4日、アリゾナ州サンルイス近くの砂漠で、長さ1,300フィート(約396メートル)の未完成の国境を越えるトンネルが発見されている。
Photo Source/Jerry Glaser, CBP

ミリタリーからシークレットサービスまで

UZI SUBMACHINE GUN

イスラエルが生んだ銃の代表格とも言えるUZI。
このサブマシンガンの兵器としてのポテンシャルは
シンプルな外観からは想像できないほど高い。
有名だが掘り下げられる機会が少ない実力者、UZIの真の姿に迫る。

Report by KEN NOZAWA

図版解説 / 鈴木健太郎

Photo / Government Press Office (Israel)、
Israel Press and Photo Agency (IPPA) / Dan Hadani collection、
Dutch Ministry of Defence, Nationaal Archief、
U.S.ARMY, U.S.NAVY, USAF, USMC, WPP Archive
Illustration / M.Kelly

成功した二種のサブマシンガン二種 化した仕様・機能の目的とは

ミリタリー関連に限らず、法執行機関でも活躍する火器類だが、中でも発展の勢いが大きいのがサブマシンガンである。このことは、裏を返せばサブマシンガンはまだまだ“発展途上の火器”であり、また、あらゆるシチュエーションに対応できる可能性を秘めていると言うこともできる。過去において多種多様のサブマシンガンが生み出されてきたが、その中からもっとも成功した機種を挙げるとふたつに絞られる。ひとつはH&K社のMP5シリーズであり、もうひとつはIMI（現・IWI）社のUZIサブマシンガンである。それら二種のサブマシンガンはまったく異なった仕様と目的をもって造られたが、どちらも同等に世界で認められてきた。とくにUZIサブマシンガンは、第二次世界大戦時に記録的な生産数を誇ったイギリスのステン・サブマシンガンの400万挺、ソ連のPPSh-41の500万挺を超える1,000万挺（以上）が生産されている。

その成功の秘密はどこにあるのか？

ここでは、日本でも広く知られるUZIサブマシンガンを紹介していきたいが、その実力を正しく知ってもらうためにも、最初に、サブマシンガンの基本的な機構と機能を再確認したい。MP5シリーズとUZIサブマシンガンという対極に位置する二種のサブマシンガンが、まったく異なる二機種がなぜ共に成功したのか？を知ることで、よりしっかりとUZIサブマシンガンの存在価値を実感で

きると信じるからである。

さて。

これは過去のサブマシンガン記事（米国のM3、ソ連のPPSh-41など）内でも触れているが、サブマシンガンは大きく二種に分類できる。ひとつはクローズボルト仕様であり、もうひとつはオープンボルト仕様である。それら二種は異なった作動方式であり、もちろん、明確な目標・目的があつての仕様・機構・開発となる。

クローズボルト仕様の代表格は先述のMP5シリーズだ。これは銃本体の軽量化が可能であり、かつ旧来のサブマシンガンと比べ精度の高い射撃を実現している。その理由は大きくふたつある。

●射撃時にボルトが移動せず銃を安定保持できる
●引鉄を引いてから弾丸発射までのロックタイムが短い

対してオープンボルト仕様のサブマシンガンは上記の2点が適わず、そのまま短所となり、重量は大きく、精度の高い射撃は望めないとされている。

火器は、同程度の性能であるならば小型・軽量であるほど有利という原理・原則があるため、クローズボルト仕様のサブマシンガンは「オープンボルト仕様の上位変換機種」と表現されるほどである。

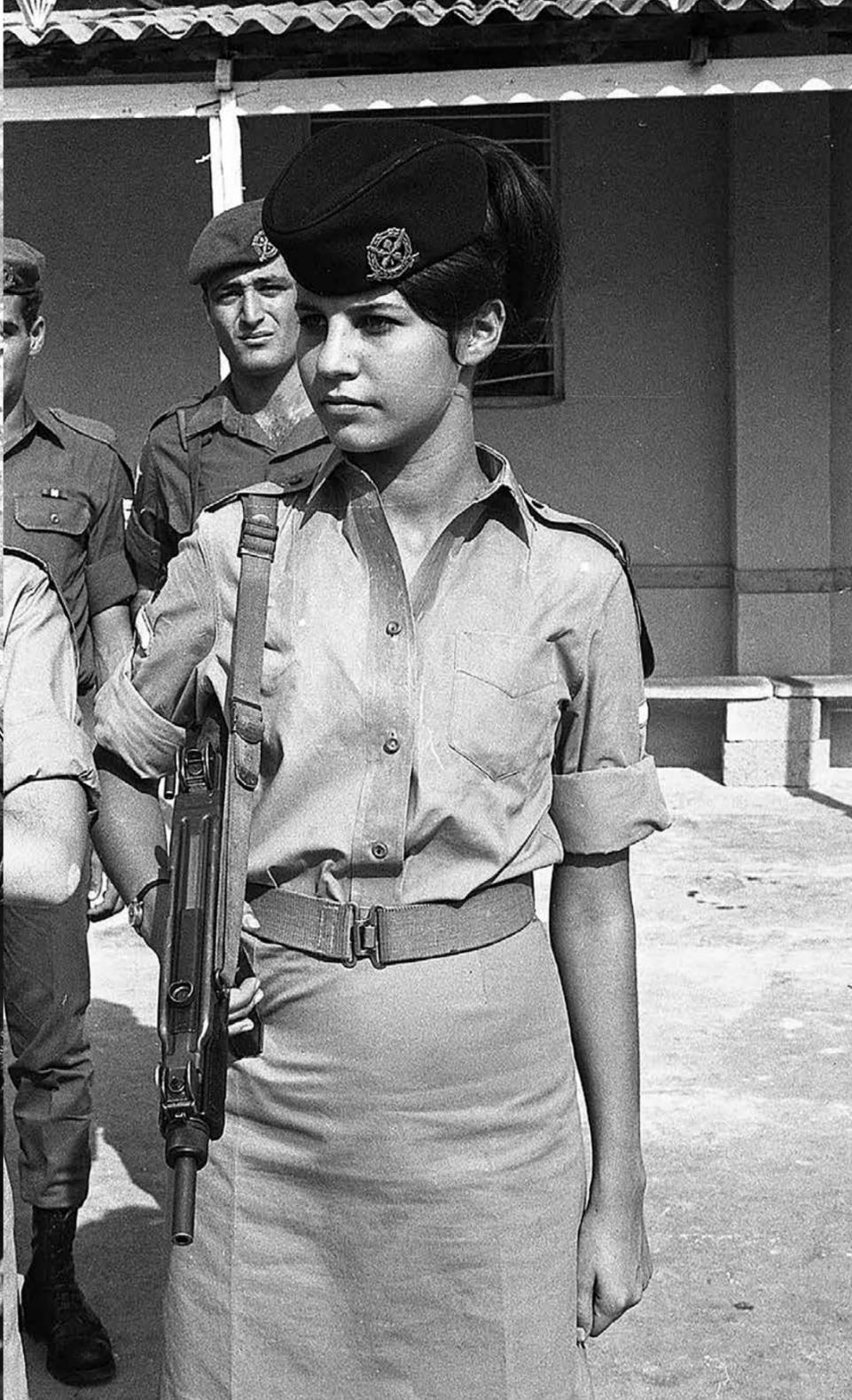
確かにそれら二種の間には、そういった機構上での差異があり、結果的に性能差が生まれるが、では本当に「上位変換機種」なのか？ となると疑問が残る。

ここでひとつの例を挙げると、サブマシンガン

UZIは取り回しやすさと実用性を兼ね備えたサブマシンガンとして不動の地位を確立し、よりコンパクトなバリエーションモデルものに登場した。ここで用いられているのは最小クラスのマイクロUZIで、鋭い視線で狙いを定めているのはアメリカ海兵隊と合同訓練中のヘルメット特殊部隊員である。



(左中右) UZIを手にしたイスラエル軍の女性兵士たち。どの兵士も4キロ近い重量があるこの銃を片手で保持しながら力んだ様子がほとんど感じられず、人間工学を重視した設計が功を奏しているのが良く分かる。またここに写っているUZIはすべて木製の一体型銃床を備えたタイプで、スリングスイベルの一端が銃床の後端に付けられているため肩や腕の後ろまでスリングがしっかり回り込み、兵士の負担を減らすのに貢献している。



した理由は、コンパクトにデザインしながらも充分な重量を持たせ、そして9mmルガー弾を選んだところにある」と、まとめたが、無論、それ以外にも理由はある。

結果論であり当事のイスラエルの事情も関係するが、工業力が低く、専門軍人ではない一般の人たちにも武装してもらおうといった切実なる状況から、プレス加工を多用した、シンプルな構造とデザインのサブマシンガンに仕上げたことが、UZIサブマシンガンを世界的な、歴史的な一挺に高め

た所以である。

過去の記事内でも、そして本リポート内でも触れてきたが、UZIサブマシンガンを始めたとしたオープンボルト仕様のサブマシンガンは、決して時代遅れの機種ではない。オープンボルト仕様のサブマシンガンとクローズドボルト仕様のサブマシンガンとは別物であり、同じ土俵で比べる相手ではなく、状況に応じて使い分けるべき別の火器なのである。

すでに触れているように、MP5シリーズが成功

した第一理由は、その特性を活かした点にある。

1977年のルフトハンザ航空181便ハイジャック事件での活躍はMP5ならではのものであり、当事存在したほかのサブマシンガンでは成し得なかった偉業・功績である。

ただ、だからといって、MP5シリーズがサブマシンガンにおける“絶対的な正解”とはならないのも事実である。道具であるサブマシンガンは、いやサブマシンガンに限ることなくすべての火器は、どれだけ適材適所を追求できるかに“正解”があ

る。それはつまり、どこまで目的意識を持って火器を、サブマシンガンを開発できるかに掛かってくる。

たとえばUZIサブマシンガンは、その後に派生(姉妹)機としてより小型化されたミニUZIが造られ、そのまた小型化されたマイクロUZIも生まれ、さらにそれを改良したUZIプロへと変化を見せたが、元のUZIサブマシンガンほどの成功は成し得ていない。原因として、時代の変化と多くのライバルの出現があるが、それ以外にもUZIサブマシ

ンガンの姉妹機たちが、改良・発展の流れの中で持っていた利点・長所を捨ててしまったことも関係していると感じられる。

より小型化されたミニUZIは魅力的だが、1分間に950発まで高くなりすぎた発射速度は活躍の場が限定される。それがどのような場なのか、状況なのか、IWI社の開発スタッフは熟考したのか? できたのか?

マイクロUZIのサイズは大型ピストルと同等で携行性は比類するものがないが、フルオート射撃

UZI

SUBMACHINE GUN

ベトナムで戦った Part 1 アメリカの同盟国軍

アメリカの呼びかけで作られたFWMF (Free World Military Forces=自由世界軍)。アメリカ軍と南ベトナム軍を除いたFWMFの活動を陸軍を中心に生き生きとした写真で振り返る。

文/鈴木健太郎 写真/AUSTRALIAN WAR MEMORIAL, IMPERIAL WAR MUSEUM, NARA, WPPアーカイブ



アメリカ軍のUH-1に乗り込む準備を整えるRAR第7大隊の兵士たち。ここでは兵士が一人としてヘッドギアを着用していないが、ベトナムに派遣されたオーストラリア軍歩兵は後方ではスローチハットと呼ばれるフェルト帽、戦地ではつばの柔らかいブッシュハットを被り、ヘルメットは滅多に着用しなかった。

AUSTRALIA

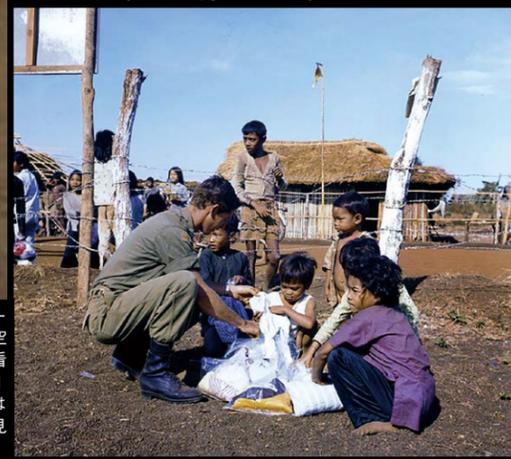
オーストラリアは1962年という早い時期に軍事顧問としてベトナム オーストラリア陸軍訓練チーム (AATT) を派遣しており、64年に空軍の輸送部隊が活動を開始、65年には陸軍歩兵連隊 (RAR) の第1大隊がアメリカ陸軍第173空挺旅団に組み込まれて作戦行動にあたっている。66年に入るとオーストラリア軍は増派を進めるとともにこの地での活動に特化した第1タスクフォース (1ATF) を編成、1ATFはRARを中核として砲兵部隊、機甲部隊、航空部隊、兵站の各部隊、特殊部隊SAS、さらには海軍と空軍の部隊も組み込まれており、全盛期は8,500人を超える兵力があったのだが、そのうち7,000人以上が陸軍所属だった。オーストラリア軍はアメリカのベトナム化政策に伴い70年以降は兵力を削減、1973年に撤退を完了した。



第1装甲兵員輸送車中隊のM113とRAR第6大隊の兵士たち。オーストラリア軍の機甲部隊ではイギリス軍と同様に黒いベレーが制式のヘッドギアとなっており、ここでもM113の乗員によって着用されているのが分かる。



(左上) 第1機甲連隊のセンチュリオン戦車。前面には増加装甲の代わりとして予備転輪が乗せられているが、この用法はベトナムでは良く見られた。(右上) M113から降りたRAR第1大隊の兵士が出撃準備を整えているところ。胸元にアメリカ軍とは異なる英軍型のドッグタグを付けているのに注意。(左下) 贈り物の衣類を村人に手渡す第1民事部隊の兵士。オーストラリア軍は戦闘だけでなく後方支援にも深く携わっていた。(右下) 解放戦線が遺棄したSKSカービンを検分するRAR第6大隊の兵士たち。供与品のM16ライフルとM1956装備でアメリカ軍兵士と良く似た外見となっているが、M1956装備はオーストラリア製のものも用いられていた。



(下左) RAR第1大隊のベースキャンプにあった売店の様子。ベースボールキャップを被っているのはおそらくアメリカ陸軍第173空挺旅団の兵士である。(下中) ブンタウの街で買い物を楽しむ陸軍看護部隊の看護師たち。(下右) ダットドー村で捜索任務にあたる第1情報分遣隊の兵士とベトナム人通訳。左の兵士が持っているのはL1A1の分隊支援火器版、L2A1で30連弾倉が付けられており少し見えづらいが折りたたみ式の二脚を備えている。



(左奥) RAR第1大隊のベースキャンプに立てられた看板。ライフルとカンガルー、そしてプーメランを組み合わせたRARのエンブレムが描かれている。(左) トラックで移動するRAR第8大隊の兵士たち。シャツの左肩にはオーストラリア軍を示す「ライジングサン」のバッジが付けられており、奥の兵士が被るスローチハットにはRARのバッジの姿もある。(右) ブッシュハットを被りジャングルを慎重に進むRAR第5大隊の兵士たち。オーストラリア軍ではL1A1ライフルとオーウェンサブマシンガンなどの制式品のほかにアメリカから供与された火器も多く用いられており、ここではM60機関銃を持った兵士が写っている。



LIFEが語る ベトナム戦争

20世紀アメリカ社会と兵士の顔

文／原克(早稲田大学教授) 構成／編集部

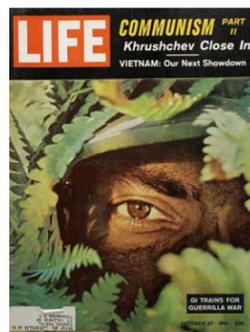
THE TOUGH ENEMY

第4回

手強い敵

鏡像としての神話的欲望

ロラン・バルト『現代社会の神話』によれば、「火星人」は「人間の分身」に他ならない。遙か宇宙の彼方から、地球に飛来するほど高度な文明をもった火星人は、なるほど「絶対他者」である。がそれは同時に、人間の究極の理想型と同質でもある。つまり、「超越的な他者」、それは裏返せば「理想の自分」に他ならないということだ。火星人とは宇宙時代の神人同型論そのものだ。そうだとすると、戦場で対峙する「手強い敵」、超越的な他者。それは脆弱で、優柔不断な「自分」を反転させ、理想化した「分身」ということになる。戦場の神人同型論。アメリカ消費社会の対極にあるベトナムの密林。そこに棲む、強靱で、不屈な闘志をもったベトナム。市民的快楽に背を向け、死地に赴く北ベトナム兵。神出鬼没な敵の超越性は、じつは米兵の現実を反転させた鏡像に他ならない。そこにあるのは、倒錯した「同一者」の神話である。



左／表紙「ベトナム：われわれの次の天王山」。「事案の重要性と報道写真の迫真性に鑑み本号は主要部門（17ページ）をベトナムに当てることに決定した。編集長」。米国随一の人気を誇るオピニオンリーダー誌もベトナム戦争特集を初めて組む必要性を痛感した。 (LIFE1961-10.27) 中／表紙「ベトナムでの醜い戦争」。「米軍将校がパトロールを率い部隊の先頭に立つ」。正式な軍事介入前夜のレトリック「軍事顧問団派遣」。「キンロン小さな町の郊外で作戦任務に就いていた武装兵員輸送部隊の顧問は手足の長い米軍中尉」。翌日ベトナムの奇襲に遭遇し米軍中尉は戦死した。(LIFE1964-6.12) 右／表紙「集中砲火のコン・ティエン」。非武装地帯に接した米軍海兵隊戦闘基地に北ベトナム正規軍が大規模な攻撃を仕掛けた。激戦の夜、地下壕は静まりかえり規則的な寝息とモンスーンの驟雨でできた水たまりにいるカエルの声が聞こえてくるだけであった。(LIFE1967-10.27)



象のパトロール

『ライフ』1961年10月27日号は警鐘を鳴らしている。

敵は手強いぞというのである。

「ベトナム：われわれの次の天王山」⁽¹⁾と題された特集記事だ。

「観光ポスター以上に」のどかな楽園ベトナム。そこに、戦乱が迫っていると報じている。

曰く、「この愛らしい国を醜い戦争が取り囲んでいる。南ベトナム軍は兵力16万人で共産主義ベトナム軍に対して10対8で優勢である。しかし、敵は北ベトナムによってよく訓練され、指揮されており、共産軍の戦略と地形に助けられ、打ち負かしがたいように見える」⁽¹⁾。

実際、緒戦は出鼻をくじかれた。

「最初南ベトナムは敵と対するのに、大規模な陸軍を使い、伝統的な歩兵戦術でゲリラと戦おうと試みた」。ところが、「ゲリラは予想を超えて粘り強く応戦した」⁽¹⁾。

そこで、「アメリカ軍は対ゲリラ戦術を訓練しなおし、南ベトナムに軍事顧問団として、ゲリラ掃討作戦の専門家を送り込まざるをえなくなった」⁽¹⁾。こう言うのである。

「打ち負かしがたいように見える敵」。アメリカの軍事介入が本格化する前、かなり早い段階で、この記事は敵の作戦遂行能力に、神経をとがらせているのである。

翌年、『ライフ』1962年3月16日号は、同じく神経質になっている。「象に乗って出撃」⁽²⁾と題された冒頭グラビア記事だ。

一瞬、読者はわが目を疑う。これは本当に20世紀の戦争か？

全ページ大で映しだされているのが、象に乗った作戦部隊だからだ。

「中部南ベトナムのジャングル丘陵地帯」、「南ベトナム陸軍パトロール部隊が、四頭の象の背中に揺られて出発する」⁽²⁾。

この地域では、「数世代にわたって、戦士はこの方法で戦いに出かけてきた。今なお政府側も敵側も、同じく巨大な動物を利用している」。熱帯の密林。「徒歩で進もうとしても」前進できないからだ⁽²⁾。

なんとものどかな風景である。だが、記事は国際情勢を忘れていない。釘を刺すのである。

「しかし、この古風な光景からは、ベトナムの残酷な戦争の本質は見えてこない。この象のパトロールがむかう先のどこかで、敵のゲリラが強力な最新兵器をもって、待ち伏せしている確率が、高いのだ」⁽²⁾。

敵は最新鋭の兵器を携え、満を持して待ち構えているに違いない。やはり敵は手強いぞ。『ライフ』はこう推論しているのである。

タフな敵

敵は手強いのではないかと、こうした疑念の糸譜は続いてゆく。

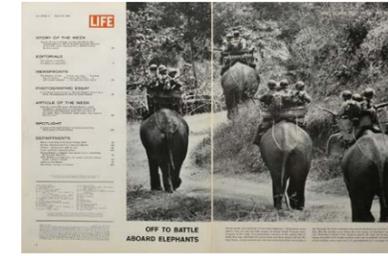
『ライフ』1964年2月14日号もそうだ。特集記事「贅沢に包まれ世界を震撼させる」⁽³⁾が、同じ疑義を共有している。

ド・ゴール大統領の新政策「東南アジアにおけるフランスの中立化」により、抑えが効かなくなり、ベトナム国内情勢が不安定化する。そんな危機的状況を論じた記事だ。

すべての当事者が分析されている。

「ワシントンではジョンソン大統領が、南ベトナムに対して、援助の手を差し伸べるのを中止することは絶対ないと、宣言している」⁽³⁾。

「サイゴンではグエン・カーン将軍が、



最上段／「愛すべき国..爆発する危険性」。「東洋の中でも南ベトナムほど観光ポスター以上に、素晴らしい人びとに溢れ仏教の伝統が豊富で楽しい国はない。だが今日、恐ろしい顔つきのゲリラ兵士と可愛らしい女性たちが共存する国でもある」。「豊かな田園の暮らしは穏やかだ」。(LIFE1961-10.27) 二段目／「ゲリラ戦術メイドインUSA」。ノースカロライナ州ブラック陸軍基地ゲリラ戦術訓練場。同上。 三段目／「戦勝への橋。ナ・トラン近郊の険しい地形。心もとないロープを使ってベトナム軍特殊部隊が吊り橋渡河訓練をする。発煙弾で戦場の硝煙を再現しヘルメットにはカムフラージュ用に木の枝を差し込んでおく」。訓練コースを終えると共産主義者支配地区に出撃だ。同上。 最下段／「四頭の象の背中に揺られて南ベトナム陸軍パトロール部隊が中部南ベトナムのジャングル丘陵地帯に出発する。伝統的な出撃方法だ」。(LIFE1962-3.16)

¹ "The Lovely Land That ... May Blow Up" in: LIFE, 1961, January 6, p.36ff.

² "Off to Battle aboard Elephants" in: LIFE, 1962, March 16, p.2

³ "In Splendor He Shakes Up The World" "De Gaulle's new neutralist course for Asia triggers action in Vietnam" in: LIFE, 1964, February 14, p.18ff.



CZ Shadow2 COMPACT

銃器メーカーの新製品発表のタイミングは、ショットショーやIWAショー、NRAショーといったその年の1~6月に行なわれるイベントの前後が多い。しかし、今年の夏、CZ社はサプライズとして驚きの新製品を発表した。それが今回紹介するCZ Shadow2 Compactだ。



CZ Shadow2 COMPACT
●口径:9×19mm ●全長:191mm
●重量:870g ●装弾数:15発
●価格:1299,00ドル
※マークアップされた価格は平均1800.00ドル前後とのこと。



CZ社のピストル・ラインナップ

日本で有名なCZ75系の銃といえば、アメリカでは「ショート・レイル」の愛称で呼ばれることの多い初期型だ。過去にも何度か言及したが、ショート・レイルは、コレクターズ・アイテムとなっており、オークションでも目にする機会はかなり少ない。銃の状態にもよるが、現在ではおよそ2,500~4,000ドル程度で取引されることが多いようだ。現在の本家CZ社のCZ75系統のラインナップは、ショート・レイルの現代版といえるCZ 75 B、そのコンパクト・モデルとなるCZ 75 P-01のふたつだ。そして、CZ75系統の派生シリーズとして、CZ 75 SP-01 Shadow1、コンベ

イターの装着されたレースガンとなるCZ 75 TS CZECHMATE (チェックメイト)、CZ TS (タクティカル・スポーツ) シリーズ、そして、今回紹介するShadow2 Compactが属するShadow2シリーズがある。CZ 75系統は競技の場において使用することを意識した製品展開を行なっているのだろう。日常生活や法執行機関による使用を想定したモデルは、ポリマー・フレームを使用するストライカー・ピストルのP-10シリーズ、同じくポリマー・フレームを使用し、トリガー・メカニズムは、CZ75系と同じSA/DAとなるP-07/P-09シリーズとなる。

Shadowシリーズ

IPSC/USPSA等のブラクティカル・シューティングと呼ばれる射撃競技において、プロダクションと呼ばれる部門がある。レースガンではなく、あくまで箱から出した状態に近い市販品の銃を使う部門だ。そこで人気を誇ったCZ 75シリーズは、競技の場から得たフィードバックを元に、さまざまな製品展開と改良を2000年頃から行ってきた。CZ 75

SP-01は、2005年のIPSCワールドシュート(世界選手権)において、優勝者であるアダム・タイク氏、3位入賞のアンガス・ホッデル氏の2名に使用され、CZ 75シリーズがブラクティカル・シューティングの世界においてベレッタやSIG、グロックといった“一般的な銃”を凌駕するモデルであることを知らしめた。そのふたりがCZ社の開発チームに助言することで開発されたモデルがCZ

75 SP-01 Shadowだ。以降、Shadowは、IPSC/USPSAのプロダクション部門において、多くのシューターによって愛用された。そして、更なる進化を追求したCZ社は、シューター達からの要望、フィードバックを元に、勝つことを宿命としたモデル「Shadow2」を2016年に発表した。この頃から、CZ社は数多くのトップ・シューターを同社のシューティング・チームにスカウトした。とくにIPSCの歴史において、前人未だの世界選手権8連覇という、今後誰も破ることが出来ないと思われる



マガジンの装弾数は15発。他社の競合製品と比較しても十分な装弾数だ。

SIG 1911 PRO CUT Hi-CAPACITY 4.0



アウター・バレルはブラス削り出し、クロームメッキ仕上げの高性能なカスタム・パーツ。ズッシリとした重量がトップヘビーなウエイト・バランスを生み出す。



個性的なSIGスライドとハイ・キャパシティフレームを組み合わせて登場したSIG1911プロカット4.0。各部に施されたカスタム・アップが、圧倒的な存在感を漂わせる。



**TANAKA
WORKS**

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
◎タナカ・ワークス
<https://www.tanaka-works.com>

S&W PERFORMANCE CENTER M627 5inch 8-shot Stainless Finish Ver.2

and

S&W .38 Chief Special Airweight “Baby Aircrewman”HW Ver.2

希少性の高いS&Wリボルバーをリアルにモデルアップした
タナカ・ワークスのモデルガン





Militaria Roundup!

U.S. NAVY ユニフォーム Part 2

第1次大戦で兵器として本格的に使用されはじめた潜水艦。アメリカ海軍潜水艦は1930年代から本格的発展を開始し、太平洋戦争では勝利に大きく貢献。そして現在は空母とともに海軍の主力の地位を占めるに至っている。アメリカ海軍ユニフォームを紹介するシリーズの今回は艦上作業服と呼ばれるユーティリティ・カバーオールと、第2次大戦中の潜水艦乗組員ユニフォームを紹介しよう。

解説/菊月俊之 写真/青木健格 撮影協力/サムズミリタリ屋 <https://www.sams-militariya.com/>、中田商店 [03-3823-8577 https://www.nakatashoten.com/](https://www.nakatashoten.com/)、MASH [06-6567-3312 http://www.mash-japan.co.jp](http://www.mash-japan.co.jp)

アメリカ海軍の潜水艦

潜水艦（潜航艇）が発明されたのは17世紀にさかのぼるが、最初の実戦投入されたのはアメリカ独立戦争（1775～83年）中の1775年に大陸軍が使用した“タートル”だった。そして南北戦争（1861～65年）では南軍が潜航艇「ハンリー」を実戦投入し、北軍の軍艦「ファサトニック」を撃沈。これが潜水艦による世界最初の撃沈戦果となったが「ハンリー」も爆発の巻き添えで沈没している。

近代的潜水艦の第1号は1900年に就役したアメリカ海軍の「ホランド」だが、その後アメリカ潜水艦はドイツやイギリスの技術に追い抜かれてしまう。潜水艦が本格的に兵器として使用されたのは第1次世界大戦（1914～18年）で、ドイツ軍のUボート（ドイツ語Untersee Bootの略で「潜水艦」の意味）が無制限潜水艦戦による通商破壊で連合軍を苦しめている。

第1次大戦におけるアメリカ潜水艦の実績は貧弱だったが、1933年から実用的な潜水艦を開発。太平洋戦争（1941～45年）の緒戦では日本軍の真珠湾奇襲で壊滅状態となった太平洋艦隊に代わり、海軍の主力として戦った。太平洋戦争では250隻の潜水艦が戦闘に参加し、通商破壊、不時着水した飛行兵の救出、急襲陸戦隊（レイダース）の輸送とさまざまな任務に従事し、対日の勝利に大きく貢献。戦争中にアメリカ軍が撃沈した日本艦船の55%は潜水艦によるものだった。

戦後の1955年にアメリカ海軍は世界最初の攻撃型原子力潜水艦SSN-571「ノーチラス」を就役させ、59年には弾道戦略原子力潜水艦SSBN-589「ジョージ・ワシントン」が就役。冷戦期（1947年頃～89年）における核抑止力の一翼を担った。現在は攻撃型、弾道ミサイル原子力潜水艦、そして巡行ミサイル原子力潜水艦（SSGN）が就役しており、その数は72隻。現在アメリカ海軍の潜水艦は大陸間弾道弾（ICBM）、戦略爆撃機と共に核戦力の一翼を担い、秘密裡に作戦行動を実施している。



アメリカ海軍の原子力潜水艦は攻撃型（SSN）、弾道ミサイル型（SSBN）、巡航ミサイル型（SSGN）の3種が就役中。船体分類記号の“S”は“Submarine（潜水艦）”で“N”が“Nuclear（原子力）”。そして“B”が“Ballistic Missile（弾道ミサイル）”で、“G”が“Guided Missile（巡航ミサイル）”を意味する。写真はロサンゼルス級潜水艦SSN-706アルバカーキ。（Photo：Department of Defense）

太平洋戦争のアメリカ潜水艦は大陸沿岸海域や日本近海で、日本と南方資源地域を結ぶ航路に攻撃を集中。総トン数500トン以上の商船1113隻を撃沈し、日本の海上補給路を事実上遮断した。図版は“Kill（撃沈）”と題された、太平洋戦争中の1943年に描かれた潜水艦の活動を描いた絵画の1枚。（U.S.Navy）



太平洋戦争におけるアメリカ海軍の艦隊潜水艦の主力はガトー級と改良型のバラオ級で、排水量1825t、水上航続距離1万1000海里（1海里は1.852km）、水上で20ノット、水中で9ノットの速力を出せた。写真はハワイの太平洋艦隊潜水艦博物館に記念艦として保存公開されているバラオ級潜水艦SS-287ボウフィン。（Photo：Department of Defense）

潜水艦乗組員ユニフォーム

現在と異なり、第2次大戦中のアメリカ海軍服装規定では潜水艦乗組員のユニフォームを独立した項目として扱っていた。ユニフォームを構成するのは①特殊冬期衣料（Special Winter Clothing）と②荒天用衣料（Four Weather Clothing）で、それ以外は勤務内容や季節、そして階級に応じた海軍ユニフォームを着用した。

荒天用衣料は防水布（WW2当時はオイルクロスを使用）で作られたユニフォームで、①レインコート、②ショート&ロング・コート、③トラウザーズ、④サウウェスター（荒天用の帽子）から構成される。荒天用衣料は水上艦と潜水艦の双方で使用されたが、潜水艦乗組員の場合は①コート（ショート・タイプ）、②トラウザーズ、③サウウェスターの3点を着用した。なお前述した特殊冬期衣料を構成するアイテムに関しては別表に示したので、そちらも参照されたい。

太平洋戦争でアメリカ海軍潜水艦隊は通商破壊作戦に従事し、日本のシーレーンに大きな損害を与えた。写真は終戦直前の1945年8月にハワイ真珠湾に帰港した潜水艦USSバーブ（SS-220）の乗組員。彼らが掲げているのは艦の戦果を記録した戦勝旗で、同艦は1942年から45年の間に12回の哨戒任務に従事している。ちなみに水兵が着用しているのは作業服のダンガリーズ。（Photo：U.S.Navy）



ユーティリティ・カバーオール COVERALL, UTILITY

ユーティリティ・カバーオールは次回パート3で紹介するNWU（Navy Working Uniform/NWU）と共に海軍の作業服と規定され、すべての海軍艦船において船上作業服（Shipboard Working Uniform）として着用が認められている。カバーオールは腰に通常のユニフォーム用ベルト、またはナイロン製のリガー・ベルト（Rieger's Belt）を締めるが、現在は後者を使用することが多い。

カバーオールの素材は前回紹介したユーティリティ・シャツ（1990年代以降採用のタイプ）と同じポリエステル65%、コットン35%の混紡。カバーオールには素材の異なるバリエーションが存在しており、Type Iでは難燃素材のアラミド100%が使用されている。2014年には素材に難燃性の素材を使用したバージョンがFRV（Fire Resistant Variant/耐火性バリエーション）として採用。17年にはさらに難燃性を向上させた改善型が“IFRV”（IはImprovedの略で「改善」の意味）として採用され、旧タイプは順次廃止されている。



ラベル

カバーオールに付けられたラベル。契約番号から2008年発注分であることが判る。洗濯に関する注意として「洗濯機は温水（最高40℃）を使用。漂白剤は使用しない。中温（ミディアム・ヒート）でタンブル乾燥。乾燥後はすぐに取り出し、畳むかハンガー掛け。アイロンで補修または船上洗濯規定IIにしたがう」とある。

ユーティリティ・カバーオールはネイビー・ブルーのつなぎ服で、男女兼用。海軍ユニフォームでは作業服に分類され、主に艦上作業服として着用されている。素材はポリエステルとコットンの混紡だが、現在では耐火素材を使用した“IFEV”と呼ばれる改善型耐火バリエーションと交代している。カバーオールの前合わせはスライドファスナーで閉じられ、襟は開襟で着用される。（撮影協力：サムズミリタリ屋/現用米海軍 カバーオール）



襟

カバーオールの襟は開いた状態で着用するが、閉じることが可能なように前合わせの一番上にはボタンが付く。写真の襟には糸が付いているが、これは布製の階級章を取り外した跡。

カバーオール構成アイテム

カバーオール
9inブラック・レザー・ブーツ
クルーネック（丸首）・アンダーシャツ
アンダーショーツ
ベルト
バックル
ネーム・テープ
オプション
ボール・キャップ
イアマフ（上着着用時に限定）
黒手袋（ノンレザー）
モックネックセーター※
※襟元に高さのあるセーター

胸ポケット

胸ポケットはフラップ付きのパッチ（貼り付け）式で、左胸（写真）にはペン差しが設けられている。カバーオールの左胸ポケットの上には“U.S. NAVY”識別章と資格章を着用するが、写真では取り外されている（右胸には名札を着用）。ちなみに現在ではフライト・ジャケットのようなベルクロ式のネーム・タブに変更されている。



スライドファスナー

カバーオールの正面はスライドファスナーで閉じるが、開襟で着用するのが前提のため上端は胸ポケットの上縁と同じ高さとなっている。写真のカバーオールにはアイデアル社の真鍮製スライドファスナーが使用されている。

ベルトループ

カバーオール着用時には布ベルトを着用するため、前に2か所、後ろに3か所のベルト・ループが取り付けられている。サイドポケットは胸と同様にパッチ式で、フラップは付かない。



ユーティリティカバーオールを着用した男性将校と女性海曹。男性将校のカバーオール右袖に付いているパッチは難燃性の素材を使用した新型のIFEV（改善型耐火バリエーション）であることを示すもので、恐らくは暫定的なもの。（Photo：U.S. Navy）



※上記の写真には東京マルイ純正パーツではないオプションパーツを装着して撮影しています。



VSR-ONE ファントムブルー
 ●全長:614mm/800mm(ストック伸展時) ●重量:2,100g(空マガジン含む)
 ●インナーバレル長:200mm ●発射方式:スプリング式エア、可変HOP-UP搭載
 ●装弾数:30発 ●価格32,780円 ●好評発売中!



VSR-ONE ステルスグレー
 ●全長:614mm/800mm(ストック伸展時) ●重量:2,100g(空マガジン含む)
 ●インナーバレル長:200mm ●発射方式:スプリング式エア、可変HOP-UP搭載
 ●装弾数:30発 ●価格32,780円 ●好評発売中!

TOKYO MARUI BOLT ACTION AIR RIFLE VSR-ONE 新色カラーバリエーション

Photo & Text by Takeo Ishii 東京マルイ ☎03-3605-1113 www.tokyo-marui.co.jp 撮影協力/BATON Range https://www.batonrange.com

フォアエンド両側面と下部にM-LOKスリットが並び汎用性を高めている。またトリガーガード前の面が銃身軸と平行で三脚やバリケードに銃をレストし易いのが嬉しい。

セフティは親指で素早く操作できる位置と形状。素早いコッキング動作を助ける大型ボルトハンドルは着脱も可能。シリンダーは短いバレル長に合わせた専用セッティング。

太く遅いサイドスイング式ストックは基部もガッシリとした造り。折り畳むと確実にロックされ、そのままコッキングや射撃も可能。グリップはいわゆる「M4規格」。

バレル先端のフラッシュハイダーを外すと14mm逆ネジが現われ、各種サブプレッサー等に対応。操作性に優れたスライド式HOP調整レバーもVSRシリーズ人気の理由の一つ。

“都市型ストリート系狙撃銃”に鮮烈COOLな新色バリエーション登場!

ベストセラー・ボルトアクション・ライフル「VSR-10」の卓越した性能や操作性はそのままに、極太ショート・アウターバレル、M-LOKスリットを備えたシャーシ型フォルディング・ストック、新型マウントレール、大型ボルトハンドル、M4系のピストルグリップ……と、数々の新造パーツを投入し、実銃界・サバイバルゲームで流行の「軽量樹脂製フ

ォールディング・ストック仕様ショートライフル」を体現したVSR-ONE。その「都市型・ストリート系デザイン」のイメージをさらに加速し、増幅し、発展させ、拡張する、COOLな2カラー「ステルスグレー」、「ファントムブルー」で鮮やかに彩られたファッションナブルなバリエーション・モデルが登場!



DJちゅうの
GEARHEADS #ゼロオペ #zerooperators
JUNCTION ゼロオペレーターズ
ノットファイナル

GEARHEADS [ギアヘッズ]
熱狂的な装備フリーク—
JUNCTION [ジャンクション]
接合、連接、交差点または分岐点—

Military Photo Session
Event 2023.10.22
ZERO OPERATORS
NOT FINAL

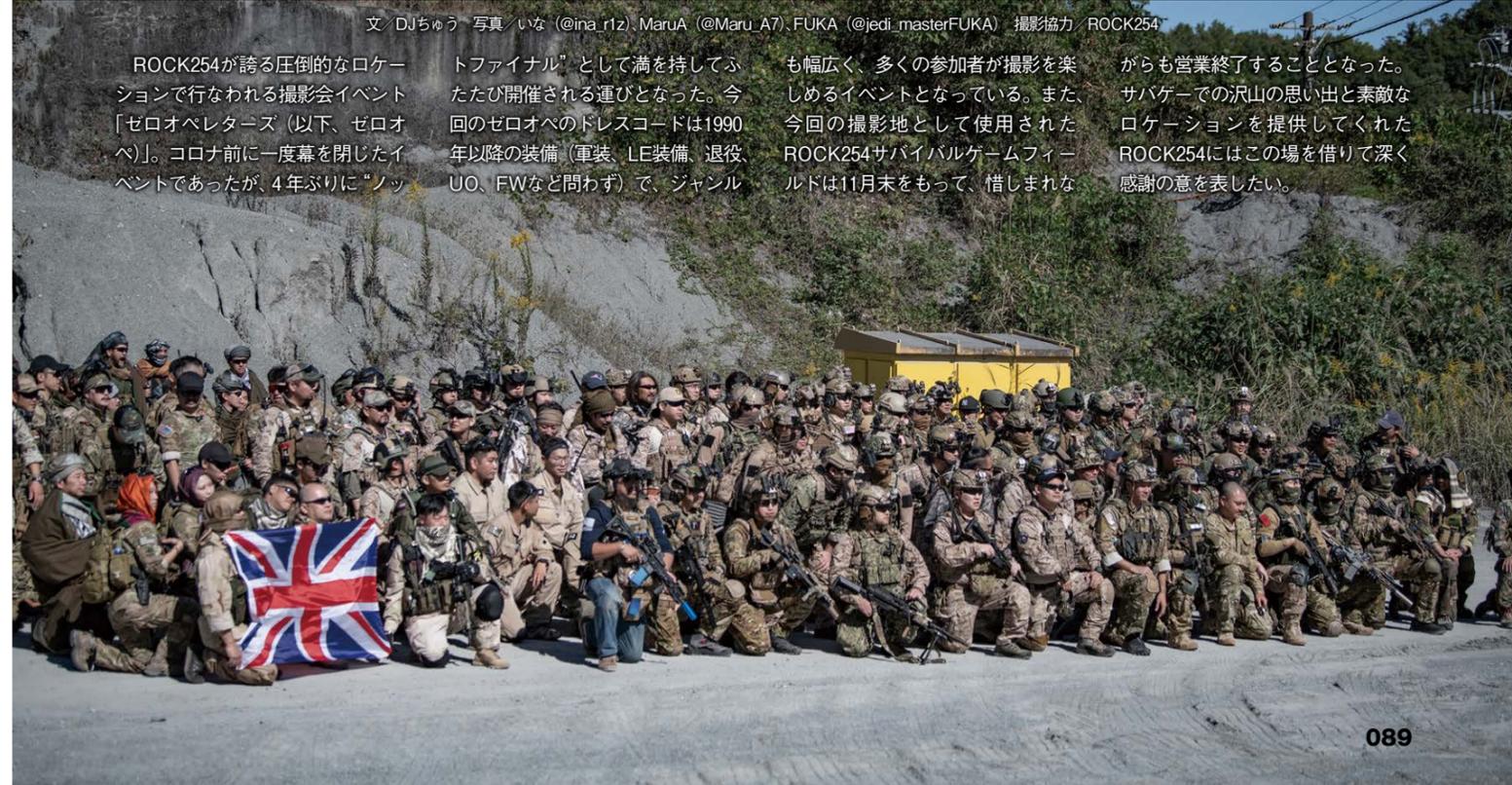
文 DJちゅう 写真 いな (@ina_r12)、MaruA (@Maru_A7)、FUKA (@jedi_masterFUKA) 撮影協力 ROCK254

ROCK254が誇る圧倒的なロケーションで行なわれる撮影会イベント「ゼロオペレーターズ（以下、ゼロオペ）」。コロナ前に一度幕を閉じたイベントであったが、4年ぶりに「ノッ

トファイナル”として満を持してふたび開催される運びとなった。今回のゼロオペのドレスコードは1990年以降の装備（軍装、LE装備、退役、UO、FWなど問わず）で、ジャンル

も幅広く、多くの参加者が撮影を楽しめるイベントとなっている。また、今回の撮影地として使用されたROCK254サバイバルゲームフィールドは11月末をもって、惜しまれな

がらも営業終了することとなった。サバゲーでの沢山の思い出と素敵なロケーションを提供してくれたROCK254にはこの場を借りて深く感謝の意を表したい。





北部方面隊 戦車射撃競技会

知る人ぞ知る毎年恒例の北海道で開催されている戦車射撃競技会。今年「令和5年度北部方面隊戦車射撃競技会」として、4つの師団および旅団から戦車部隊が参加。北海道最強……いや日本最強の戦車部隊の栄光を勝ち取るため、連日咆哮を轟かせた――。

北部方面隊では、毎年方面隊隷下の第2師団（旭川駐屯地）、第7師団（東千歳駐屯地）、第5旅団（帯広駐屯地）、第11旅団（真駒内駐屯地）の戦車部隊を集めて、戦車射撃競技会を実施している。主催者は北部方面隊と第7師団の持ち回りとなっており、

今年「令和5年度北部方面隊戦車射撃競技会」として開催された。戦車射撃競技会が行なわれるのは、北海道大演習場島松地区（北海道千歳市、恵庭市等）で、期間は10月20日から26日まで。改めて参加部隊を見ていこう――。

日本唯一の機甲師団である第7師団からは、第71、第72、第73戦車連隊の3つの戦車連隊と第7偵察隊が参加。第71戦車連隊は10式戦車を、第72、第73戦車連隊は90式戦車を配備している。第7偵察隊は、名前の通り偵察部隊ではあるが、90式戦車が

配備されている。道北を守る第2師団からは第2戦車連隊が参加。90式戦車と10式戦車を配備している。今年の3月までは74式戦車も配備しており、3世代戦車を運用する部隊という特徴を持っていた。道東を守る第5旅団からは第5戦車隊が参加。



部隊、中隊、小隊と3つの部門で第1位を獲得し、見事な完全優勝を果たしただけでなく、4連覇の栄光も獲得した第72戦車連隊の90式戦車による射撃。砲塔に描かれている白馬が部隊のシンボルマークだ。